真の友情を　君達から学んだ

　「みんなありがとう。君達から真の友情を。最高の思い出をもらった。」

　「先生、まっかせなさい。ちゃんと準備してるから。」陽気でお茶目。腕白共をも一喝する自称「越後ご前」の自信に満ちた声。「小学校最後の登山遠足。互いに励まし、力を合わせて成功させよう。」に。私の不安は消えたが、心の片隅に、体の不自由（小児まひ）な女児のことがあったことは事実だった。昼食、休憩をたっぷり一時間半。帰途についてまもなく、油汗を流し、足がよろめき出した女児。「よし、先生がおんぶ。」声に出そうとした時だった。「全員ストップ、計画実行。」ご前の一声。男児が担いできた樫の棒で即製のモッコ。「エッサ、エッサ」走る、交代する、走った。汗びっしょりの全員の瞳が光った。校門で待つ校長、保護者の拍手、拍手。お母さん方は涙。子等と私は、こぶしで天を突いた。叫んだ。「やったぞう。」

応募時（新潟県76歳）遠藤敏碩